

審査結果の要旨

氏名 佐々木 中

佐々木中氏の『ラカン、フーコー、ルジャンドルにおける宗教と主体の形成をめぐる探究』は、力強い文章で書き上げられた全500頁におよぶ大作である。ラカン、フーコーという、ともに特定分野に収まらない広く深い影響を現代の学問・思想的状況に与えている人物に加えて、中世・近代の法制史家であるとともにラカンのもとで精神分析を学び、その理論的および実践的可能性を人類学的考察へと展開したピエール・ルジャンドルが、本論文の主たる検討対象である。三者ともに、講義録を含めて多くの著作があるが、佐々木氏はそのほとんどを丁寧に読み込み、三者それぞれに対して、通説、概説的水準にとどまらない独自の理解を示している。それに基づいて、本論文は、三人の理論を相互に関連づけて読解することで、従来、多くは宗教の領域の事柄とされてきた、社会と法およびそれに帰属する主体のあり方が根源的に決定されてくる場面を探り出そうとする。

まず、ラカンの精神分析理論に内在する理論的問題点をいくつか指摘し、そこにラカンの限界を見ると同時に、別の展開への可能性を見いだす（第一部）。この可能性を引き継いだのがルジャンドルであり、彼のいわゆる「ドグマ人類学」の理論が、佐々木氏自身の考察の準拠理論ともなっている。それによれば、精神分析の限界は、ローマ法と教会法・制度を結合させて、テキストへの準拠という真理のかたちを生み出したいわゆる「中世解釈者革命」の効果としての、近代西欧の知と権力の構成枠組み自体の限界でもある。このことの認識によって、近代西欧のそれとは別の、社会および主体の形成の可能性の地平が捉えられることとなる（第二部）。このことの具体的な提示が、フーコーの仕事の入念な追跡によって遂行される。佐々木氏によれば、フーコーは、ラカンやルジャンドルの仕事の意義を認め得なかったが、いわゆる「世俗化」以降の西欧社会におけるさまざまな権力のあり方の変貌を探る彼のとくに後期の仕事は、ルジャンドルの業績と事実上密接している。この視点からフーコーを読むことで、「世俗化」自体がいわば相対化され、古代・中世において、また非西欧社会において、多くは「宗教」の事柄として考えられてきた主体の形成ないし定礎の水準が、近現代社会においても不可避免的に作動し続けていることが主張される（第三部）。この水準を理論的に明確化し（ラカン・ルジャンドル）、また近代以降の西欧社会の動向において具体的に描きだす（ルジャンドル・フーコー）ことで、「宗教」を含めた広義の社会体制および人間（主体）のあり方が、歴史の中に新しく開かれうる可能性を指摘することが、本論文の目的であり、また結論となっている。

各著述家の精密な読解と大きな理論的枠組みの接合関係がわかりにくくなるなど、学術論文としての表現方法の上での難点は指摘されうるが、難解な諸理論と大きな課題にとりくんで、「宗教」が成立してくる根源についての一つの見解を提出するという成果を挙げた佐々木氏の力量への評価は高く、審査委員会は一致して、本論文が博士（文学）の学位授与に値するものと判断した。